

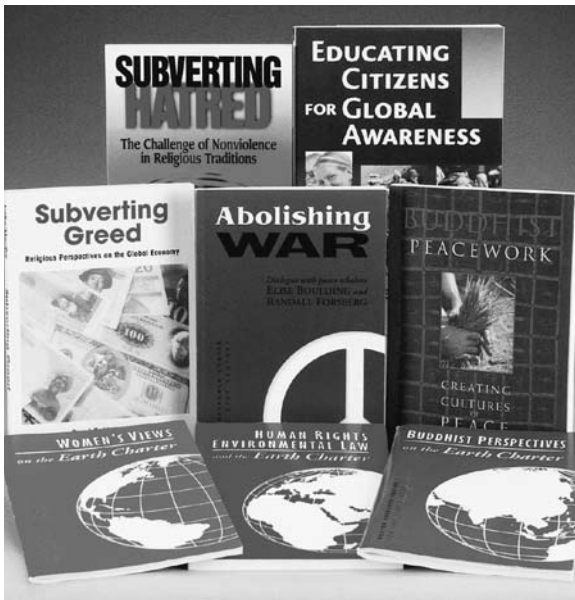
# 特別企画 「平和と共生」の地球社会へ

——「ボストン21世紀センター」論文集に寄せた池田SGI会長の序文集

東洋哲学研究所の創立者である池田大作SGI（創価学会インタナショナル）会長は、1993年秋、アメリカに平和研究機関「ボストン21世紀センター」（The Boston Research Center for the 21st Century）を創立した。

これは、暴力の連鎖や貧困、環境問題など、21世紀の地球社会が直面する難題に対し、世界の英知を結集することを目指したものであり、同センターの目標は、創立者の示した(1)地球市民のネットワークの要たれ(2)『文明の対話』の懸け橋たれ(3)『生命の世紀』を照らす灯台たれ、との3モットーに明示されている。

センターでは、これまで、非暴力、人権、女性、環境、公正な経済、現代の生死観などをテーマに、



「ボストン21世紀センター」の刊行物



ハーバード大学で2回目の講演をする池田SGI会長（1993年9月24日）。講評者のガルブレイス博士（右から2人目）らの姿も。講演では「21世紀文明と大乘仏教」と題して“大乘仏教の平和への貢献”を論じ、その具体化の一つとして、講演の直後、平和研究機関「ボストン21世紀センター」を創立した

各種セミナー、フォーラム、シンポジウム等を活発に開催してきた。

刊行した研究書も高く評価され、ハーバード大学やスタンフォード大学、コーネル大学、コロンビア大学などアメリカの諸大学はもとより、カナダ、オランダ、ドイツの大学でも、平和・教育・宗教等の講座の教材として採用されている。

教材になったのは『戦争をなくすには』『憎しみの克服——伝統的宗教の非暴力の挑戦』『仏教者の平和事業』『貪りの克服——グローバル経済への宗教の視点』『地球的視野を育む教育』『教育の道德的ビジョン——実践の哲学』と、地球憲章に関するシリーズ『女性から見た地球憲章』『人権、環境法と地球憲章』『仏教者から見た地球憲章』。反響は大きく、すでに230校・550講座以上で使用されている。

今号は特別企画として、このうち、『憎しみの克服』（1998年版と改訂版）、『貪りの克服』、『教育の道德的ビジョン』に寄せられた創立者の「序文」を紹介する。

# 『憎しみの克服』

## 伝統的宗教の非暴力の挑戦』改訂版 序文

(2007年刊)

——二〇〇〇年のある夏の日のことである。イスラエルとシリアの国境に接するチベリアス湖の浜辺で、若い二組の家族が、余暇よかを楽しんでいた。

ところが、一人の子どもが、湖で泳いでいるうちに、溺なほれてしまった。その様子に気づいたのは、もう一方の家族の父親だった。

互いに面識はなかったが、彼はすぐさま湖に飛び込んだ。そのおかげで、子どもの命は、無事、助かった。しかし、助けた若い父親は、子どもを浜に連れ戻す途中で力尽き、ついに亡くなってしまった。

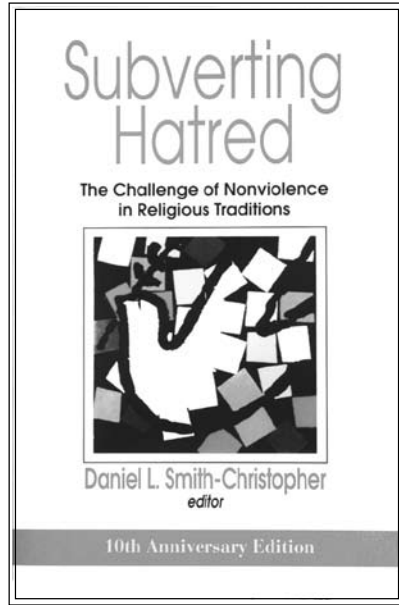
溺れた子どもはユダヤ教を、助けた父親はイスラム教を信仰していた。彼は、見も知らぬ子ども

を、自らの命をかけて救ったのである。一人の父として、一人の人間として。

これは、九・一一の同時多発テロの直後に、国連の賢人委員会が発刊した『断絶を超えて』で紹介されていた実話である。

九・一一は、「戦争と暴力の世紀」と呼ばれた二十世紀が終わり、平和の世紀の建設が待望されていたまさにその時に、その期待を打ち砕くかのよう起こった事件であった。

国連が定める『文明間の対話年』であった二〇〇一年に人々を震撼しんかんさせた同時多発テロは、今なお世界に暗い影を落としている。



世界の宗教の中の「平和思想」を探った論文集。1998年刊の旧版では①ジャイナ教②仏教③儒教と道教④ヒンドゥー教⑤北米先住民の宗教⑥イスラーム教⑦ユダヤ教⑧キリスト教が取り上げられたが、改訂版では「マオリ人の宗教」と「9・11以降のアメリカにおける『ムスリムのイスラーム学者』の生活」が加えられたほか、「ポスト9・11」の状況を踏まえ、リライトされている。同書を学生の必読教材としたブラフトン大学(米オハイオ州)のジョン・キャンペン博士は語る。「平和を口にするのは簡単です。しかし、本書は『憎しみ』とどう向き合い、乗り越えていくかを問いかけ、より積極的な平和への道を探っています」

テロに限らず、民族の違いや宗教の違いなどに起因する対立や武力紛争は、依然として世界の各地で絶えない。

私どもの平和研究機関である「ポストン二十一世紀センター」が、一九九八年に発刊した本書『憎しみの克服』(旧版)は、冷戦後の混迷を深める世界の前に、時代の喫緊きつげんの課題に真正面から取り組んだものであった。

世界の八つの伝統宗教の平和思想をめぐり、各宗教を代表する学識者が論じた本書は、宗教の違いを超えて英知を結集し、憎しみを克服して、普遍的な平和のあり方を探る画期的な試みとして、多くの専門家から高い評価を受けてきた。

また、発刊以来、ハーバード大学やコロンビア大学、スタンフォード大学、イェール大学、タフツ大学をはじめ全米で百七十五の大学の講座の教材としても採用されてきた。

次代を担う学生たちが、自らが信仰する宗教だけではなく、他の宗教への理解を深めながら、平和構

築のための英知を学び合う——本書がその一助となつてきたことに、同センターの創立者として、これ以上の喜びはない。

### 古来の英知を見直す

現代世界においては、残念ながら、「憎悪」と「暴力」が、対立し合う集団の間で、それぞれの「正義」と強固に結びつき、事態の膠着化を招いてきた面は否めない。

対立や衝突が繰り返されるたびに、憎悪や怨念が互いの集団の中で沈殿し、積もりゆくなかで、更に大きな報復を求め、暴力をエスカレートさせる悲劇が、今なお各地で続いている。

この人類の業ともいふべき古くて新しいアポリア（難問）を乗り越える道を探るために、それぞれの文化や民族の中で守り伝えられてきた思想や、伝統宗教が育んできた英知を見つめ直し、それらを総括していく作業が、今ほど待たれている時はないであろう。

仏法では、人間生命の内奥には「憎しみ」を引き起こす「悪心」とともに、「慈愛」や「信頼の心」を生み出す「善心」が内在していることを説いている。

ここでいう「悪心」とは、暴力性（瞋恚）激しい怒り・憎しみ、貪欲性（コンントロール不可能な欲望）、無明性（根源的エゴイズム）と共に、そこから発現する、異なる人種や民族、文化や宗教に対する差別の心、偏見などを指している。

「悪心」は、いわば人間社会や人間と自然を分断し、破壊するエネルギーであり、個人、宗教、民族の間に、間接的、文化的暴力を引き起こす重大な要因の一つとなっている。

一方、「善心」とは、非暴力の心や、欲望を統御する強靱な精神の力であり、利他心とそこから発現する平等心、また統合智などを意味している。それはまた、自己をとりまくすべての人々、社会、民族、人類を結び、大自然との共生をも可能にする融合のエネルギーともいえよう。



「ボストン21世紀センター」。アメリカを代表する大学都市ケンブリッジ（マサチューセッツ州）にあり、近くにはハーバード大学、マサチューセッツ工科大学をはじめとする大学、研究機関が集中している

今日の混迷する世界情勢においては、政治的、経済的なアプローチだけでは、諸問題への「対症療法」にすぎず、人々の心に渦巻く「憎しみ」への本質的な解決には、決してなり得ない。

ゆえに、たとえ時間がかかろうとも、人々の心の中に、憎悪と暴力の連鎖を断ち、創造的共生へと向かわせてゆく「善」のソフト・パワーを育むことこそ、私たちが平和構築のために採用すべきアプローチの一つではないだろうか。

#### 学び合う「宗教間対話」

この人間生命の「善性」の開発と拡大こそ、現代文明における宗教の重要な役割の一つであると私は考えている。また、各宗教が、それぞれの輝く伝統精神のなかから、その開発のあり方を示し、相互に学び合っていくのが、「宗教間対話」の意義であろう。

本書では、仏教のみならず、世界の伝統宗教が育んできた英知を浮き彫りにしながら、平和と共生の

地球社会を建設する方途が、多岐にわたって論じられ、まさに「宗教間対話」の場となっている。

今、私たちに求められているのは、宗教を、他者を傷ついたり、苦しめたりする「旗印」にするのではなく、冒頭で紹介したエピソードのように、すべての人々に本来そなわっている、やむにやまれぬ思いとしての「人間性」を蘇生させるための「糧」としていくことにあるのではないだろうか。

そのためには、宗教に通底するヒューマニズム——普遍的価値や精神性を、青年たちの心に育みゆく「人間主義の教育」の実践が不可欠であろう。

「宗教」と「教育」は両輪の輪であり、「教育」なき「宗教」は「独善」となってしまふ。「宗教」は、裏を返せば「人間教育」であり、「教育」は、深い精神性と哲学に裏付けられてこそ、真価を発揮しゆくものである。

私たちにとって、今、必要なことは、そうした教育を通して、あらゆる差異を超え、相互理解の輪を広げゆく、世界市民の連帯を築くことである。そし

て、その焦点は、憎しみの克服の可能性を最も秘め、平和の共生の未来を担いゆく青年たちであろう。

本書が、その新しい時代の扉を開くための一助となることを切望するとともに、今回の改訂版の発刊にあたって快く協力し、改訂の労をとってくださった執筆者の諸先生方に、厚く御礼申し上げます。

# 『憎しみの克服』(旧版) 序文

(1998年刊)

「ボストン二十一世紀センター」が、二十一世紀の新たな平和へのビジョンを探究する上で、先駆的な役割を果たされていることに敬意を表したい。また、卓越した学識を本書に提供してくださった諸先生方に、心からの感謝を申し上げたい。

現在、地球社会は核兵器の脅威きょういに晒さらされ、世界各地で頻発ひんぱつする紛争は、しばしば共同体を分断し、家族をも引き裂いている。

このような時代にあつては、いかにして「憎しみ」を克服していくか——「敵意」から「慈悲」へ、「懷疑」から「信頼」へ、「分断」から「結合」へと、人々と社会を向かわせていけるかが、最も重要な課題と

なる。

私たちは、「戦争と暴力の二十世紀」から、「平和と共存の二十一世紀」へと進んでいかねばならない。真の永続的な平和とは、対立する人々の間の最も深い次元において「信頼の絆きずな」が結ばれたときに、はじめて実現するものである。

本書で取り上げられている宗教的伝統は、それぞれが多様な歴史をもち、神聖な教典と儀式、そして啓発的な教訓と規範をそなえている。その意味において、それらを改めて検証し、非暴力の理論と実践の糧かてとすることは、極めて意義のあることである。



各々の宗教的伝統には、それぞれ違いがあるが、私は、多くの宗教は、人間が抱く共通の願いから発したものであると考えている。

それは、宇宙における人間の存在意義を理解したい、また「生」と「死」の不可思議に迫りたいという、本源的な欲求である。さらには、生きる上で不可避の苦悩や喪失感に直面した際にも揺るがぬ真実の人生の意味と喜びを見出したい、という願望であろう。検証にあたり、さらに重要なことは、この決定的な転換期に人類が直面している諸問題に対して、それぞれの宗教的伝統が提示できる「具体的な行動」と「具体的な智慧」を探究することである。もし、人類に未来があるとすれば、それは、共生の未来でしかありえない。それは世界の民衆、文化、宗教的伝統が交流し、共存する未来である。

### 宗教の「平和貢献競争」を

創価学会の創立者である牧口常三郎会長は、すでに二十世紀の初頭に、自著の中で、国家と国家の関

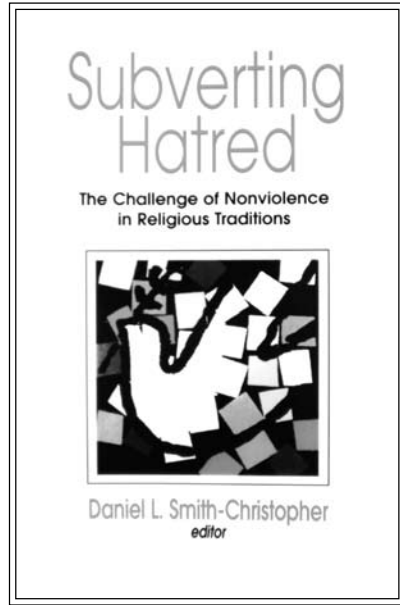
係は、やがて「人道的競争」の段階に入っていくであろうと述べている。つまり世界の各国が、人類に対して、どれだけ多くの希望と幸福を与えることができるかを、互いに競い合う時代に入るのであろうと予見していたのである。

私は、こうした「人道的競争」のモデルが、宗教にも応用可能であると考える。それぞれの伝統宗教が、人々の苦悩を取り除き、喜びをもたらすために活動しつつ、「平和創造への競争」に全力で取り組むとき、その価値を最大に発揮できるであろう。

宗教は、平和創出への精神的規範を強化するのみならず、他の側面からも人類の幸福に貢献することができる。すなわち、文化を発展させ、学問や教育、そして真理の探究の促進に寄与することができるのである。

「人間のための宗教」——これは、私の不動の確信である。宗教は人間に奉仕するためのものであり、宗教に奉仕するために人間が存在するのではない。

宗教は、「人間への奉仕」のために挑戦を続けてこ



前項の改訂版が発刊される前提として、この1998年版への高い評価があった。改訂版も含めると、これまでハーバード大学、イエール大学などの200以上の講座で教材として使用されている。

その一つであるカリフォルニア大学リバーサイド校のジューン・オーコンネル博士は「宗教は共生と建設の力にもなり、分断と破壊の力にもなります。宗教の善なる面を引き出すために不可欠なのは、人と人との出会い、対話することです。この本を教材として学んだ学生たちは、人類の共生の未来に希望がもてたと語っています。人権運動のボランティアとして、積極的に行動し始めた学生もいます」と述べている。

そ、原理主義や権威主義に陥ることなく、真の「平和の文化」、そして他者への共感を育みゆく豊かな大地となっていくのである。

本書の刊行が、あらゆる地域の人々に、「非暴力の挑戦」に乗り出す「勇気」を与え、公正で平和な、より人間的な世界の実現へ創造的な行動を促しゆく多くの有意義な対話に資することを願ってやまない。

# 『貪りの克服』

## グローバル経済への宗教の視点』序文

(2002年刊)

欲望のおもむくままに成長と繁栄を追い求めれば、人類は破綻<sup>はたん</sup>への道を突き進むことになる——今から三十年前、こう警告を発したのは、ローマクラブの『成長の限界』であった。

同クラブ創設者のアウレリオ・ペツチエイ博士と私は、後に対談集を発刊したが、博士が「人間は自らの力の絶頂にありながら、今日ほど危機に立たされたことがない」と、文明の行く末を真剣に案じておられたことが忘れられない。

二十一世紀を迎えた今、博士が憂えた危機の様相は、ますます深刻化している。

当時、焦点となっていた資源・エネルギー問題に

加えて、昨今のグローバル化の急速な進展に伴い、貧困や経済的格差の拡大や、自然環境の破壊、伝統的文化の崩壊などの「歪み」が地球全体に広がっているのである。

「ポストン二十一世紀センター」では、こうした問題群の解決の方途を探るべく研究活動を進めてきた。

### 非人道的な「経済格差」

本書は、「公正な経済」をテーマにした同センターの研究活動の一環となるもので、世界の伝統宗教が、人間の欲望を克服し、それを通して、敗者を常に



経済格差は今や、「不平等」を超えて「非人道的」とさえ言われる。そうしたなか、宗教はいかなる経済倫理を提供できるのか。これを①アフリカの伝統宗教②ヒンドゥー教③仏教④儒教⑤ユダヤ教⑥キリスト教⑦イスラーム教の観点から論じる。

論集『憎しみの克服』のテーマが、仏教で説く「三毒（貪・瞋・癡）の『瞋』いかり」であったのに続き、『貪りに焦点を当てている。編集責任者のポール・ニッター博士（ザビエル大学名誉教授）は「人間にとって真の豊かさとは何かを問いかけた本書は、宗教と経済の対話の未来を開くものでしょう」と語る。

生み出す弱肉強食的な経済のあり方を転換するため、どのような英知を供与できるかを探ったものである。

同じ地球に生きる人間として、私がとくに心を痛めているのが、世界人口の約二割を占める十二億人もの人々が過酷な貧困状態に置かれているという現実である。

その改善に努めてきた国連開発計画（UNDP）は、「もし現在の傾向が続けば、先進国と途上国の経済格差は、不公平どころか非人道的なものになるだろう」と警告している。問われているのは、政治や経済の次元にとどまらない、われわれ現代人の生き方そのものといつてよい。

制度の改善や国際協力の推進は、当然、急がなければならぬ。だが、その根底に、人間生命そのものを見つめ直す、視座がなければ、画竜点睛を欠くことになってしまう。

仏法の知見は、人間生命の三つの「煩惱」（貪・瞋・癡）を『三毒』と呼び、これらが社会の混乱や

危機を、より一層深めると洞察している。

そして、この「三毒」の一つである「貪欲」を、どこまでも満足することがなく、自己の欲望のためには他人の存在も顧みようとしない「負のエネルギー」と位置づけている。

インドの詩聖タゴールの次の言葉は、そうした人間生命の一つの側面を、鋭く言い当てたものといえよう。

「貪欲は邪悪な情熱である。だからこそ貪欲は新しいものを創造することはできない。貪欲が文明の原動力となる時、人間同士の精神的絆は弱くなってしまう。このような文明が与える物質的な富や力や繁栄が大きければ大きいほど、それだけ人間の精神力は弱まってゆく」（『人類の一体性と教育』、馬場俊彦訳、第三文明社刊『タゴール著作集』第九巻所収）

しかし、人間が生きている以上、あらゆる欲望を断つことは不可能に近い。また、欲望を極端に否定することは、人間にとって不可欠な「生へのエネルギー」を奪うことになってしまいかねない。

では、解決の道は一体どこにあるのか――。

私は、宗教的倫理に裏打ちされた「欲望の自己統御」こそ、この問題解決への重要な糸口であると考えている。

すなわち、人間のもつ「欲望」のエネルギーを、破壊や衰退の方向ではなく、活性と成長の方向へ、いかに転換できるかではないだろうか。

十三世紀の日本に出現した仏教者・日蓮は、この点について、大乘仏教の欲望論を要約して、「煩惱の薪を焼いて菩提の慧火現前するなり」（『日蓮大聖人御書全集』七二〇ページ）と説いている。

これは、「三毒」に象徴される「煩惱のエネルギー」を、質的に転換して、慈悲と智慧に光り輝く「菩提のエネルギー」へと顕現しうることを示したものである。

すなわち人間は、倫理的、道徳的な生き方によって、貪欲等に支配されるのではなく、煩惱のエネルギーを統御し、善なる方向に導きながら、プラスの価値に転じていくことができるのである。

## 「盗むなかれ」が促す「公正な経済」

それぞれの偉大な宗教の伝統には、そうした人間の根本的な倫理的生き方が含まれている。

例えば、「殺すなかれ」が憎しみの克服による非暴力を教えているように、「盗むなかれ」は「貪欲」の克服による公正な経済の実現を促している。

すなわち、他者の財産を盗み、また搾取することを戒めるのみならず、自他共に繁栄しゆく「共存」と「共生」の道を歩むことを説き示しているのである。

大乘仏教の倫理を説いた「梵網経」にも、「菩薩は常に仏性の孝順心、慈悲心を生じて、常に一切の人を助けて福を生じ樂を生ぜしむべし」とある。

つまり「他人の不幸の上に、自分の幸福を築くことはしない」「自分のしてもらいたいことを他者に行うべし」といった仏教の基本倫理を教えているのである。

巨大なグローバル経済の潮流が、「地球的不公正」

や「貧困」を日に日に拡大させつつある今日においては、冷徹な市場原理の弊害を克服し、「共生」を実現しゆく高い倫理性が、経済活動に関わるすべての個人、共同体、団体に、一層強く要請される。

宗教は、そうした人間としての基本倫理を高めて、あらゆる経済活動の基盤とし、その健全な発展を促すことにも、寄与できるのではないだろうか。

さて、「生命力とは、自己自身を失うことなしに自己を越えて創造するところの力なのである」と述べたのは、二十世紀を代表する宗教学者パウル・ティリッヒであった（『生きる勇氣』、大木英夫訳、平凡社ライブラリー）。

近年、成長一辺倒の経済への見直しが高まるなかで、新たなキーワードとして重視されるようになってきた「人間開発」も、この「生命力」に対する信頼が基盤となつてこそ真に実を結ぶことができると、私は考える。

この「生命力」には、「公正」「正義」「自由」「共存」を志向する人間本来の「智慧」「愛」「意志」、そし

て「寛容」「相互尊敬」の精神が内包される。宗教は、そうした「生命力」を顕現し、人間本来の精神を薫<sup>くん</sup>発<sup>はつ</sup>しゆく源泉となるものである。

ゆえに、それぞれの偉大な伝統を有する宗教が、自己自身の統御を通して、人間本来の倫理的生き方を開示するとともに、グローバル化しつつある経済、政治、情報等のすべての人類の営為に、倫理的基盤を提示する役割を果たしていかなばならない。

その意味において、平和と非暴力の社会を展望した『憎しみの克服』に続くシリーズとして、各宗教を代表する識者らの論考を収めた本書が、「皆が幸福を勝ち取る地球社会」を築くための一助となることを心から確信している。

# 『教育の道徳的ビジョン』

## 実践の哲学』序文

(2007年刊)

「『教育』というものは、人間と同様に宏大なものであるべきである」(論文「教育」)

若き日から愛読してきたアメリカの思想家エマソンの言葉である。

六十年前、第二次世界大戦が終結した時、私は十七歳の青年であった。

戦争ほど、愚かなものはない。日本は焦土と化した。人々は毎日を生きるのに精一杯であった。いな、精神の空洞化と飢餓感は、それ以上に大きかった。

当時、私は結核を患っていたが、昼間は働き、夜は学校で学ぶ生活の中で、渴えて水を求めるが如く、寸暇を惜しんで古今東西の名著を求め、むさぼり読

んだことが懐かしい。

戦前の日本では、「神国・日本」のために滅私奉公することが最高の美徳であるとする軍国主義教育が、まかり通っていた。日本を野蛮かつ非道な侵略戦争に走らせた大きな要因も、この偏狭なナショナリズムに基づいた教育にあったといえよう。

それが、アジア・太平洋地域の民衆に、どれほど深い悲劇と災禍を招いたか。歴史の教訓はあまりにも重い。

もちろん、政治や経済も重要である。しかし、教育の過ちは、未来に取り返しのない禍根を残してしまう。



科学技術が飛躍的に発展し、人類が宇宙に飛ぶ時代となっても、我々は人間として、果たしてどれだけ進歩したといえるだろうか。

地球規模の環境破壊は進み、貧富の格差はますます拡大し、世界の各地では、今なお紛争が絶えない。

今、最も大切なことは、もう一度、原点に立ち返ることではないだろうか。その原点とは、「人間の幸福」である。自身だけではなく、自他ともの幸福に焦点をあてた、「人間教育」である。

人間の生命には、本来、いかなる困難をも乗り越えゆく無限の「力」と「可能性」が秘められている。人間生命が等しくもつこの本然の力——「人間力」を引き出す鍵こそ、「教育」にほかならない。

私が教育を人生の最後の事業と定め、真の人間教育の確立のために力を注いできたのも、そうした信念からである。

これまで「対話」を重ねてきた世界各国のリーダーや識者の方々の多くも、同じ問題意識をもっておら

れた。

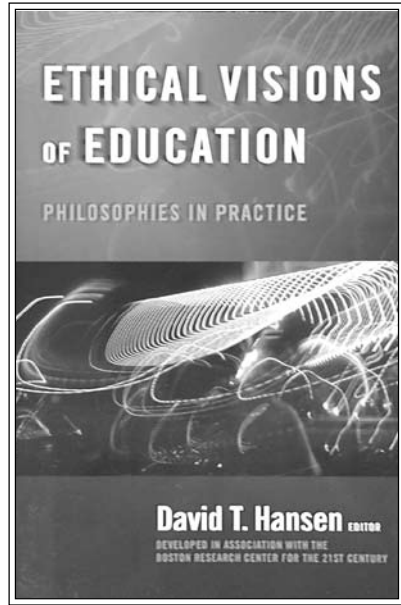
二十世紀を代表する歴史家トインビー博士も、その一人である。

百年、千年単位という大きなスケールをもって人類史を俯瞰していった博士は、戦争と暴力の悲劇の流転に終止符を打つためには、教育の力によって、民衆に「地球市民」意識を粘り強く育む以外にないと、訴えておられた。

グローバルゼーションが急速な勢いで進展し、異なる文化や民族、宗教や思想が必然的に出あい、交流する現代世界において、「互いの差異」を「創造への触発」へ、「憎悪」を「共感」へ、「対立」を「調和」へと昇華しゆく、地球市民意識の涵養は、ますます重要である。そのための「地球市民教育」が、今ほど必要とされている時代はない。

### 「地球市民」の3条件

私は、一九九六年六月、コロンビア大学ティーチヤーズ・カレッジで、「『地球市民』教育への一考察」



本書では、教育改革に尽くした世界の教育者・思想家の理念と闘争を紹介している。

デュイイ（米）、パウロ・フレイレ（ブラジル）、W・E・B・デュボイス（米）、牧口常三郎（日本）、ジェーン・アダムズ（米）、陶行知（中国）、マリア・モンテッソーリ（イタリア）、タゴール（インド）、シユタイナー（ドイツ）、シユバイツァー（フランス）の10人である。

「現在、学校を脅かしている標準化、商業化、政治化に対抗するモラルの力をもたらず書」（ジョン・デュイイ協会、ラリー・ヒックマン前会長）などの評価が寄せられている。コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ出版局刊（他の3冊はオービス出版社刊）。

と題する講演を行った。

そこで私は、地球市民の要件として、①生命の平等を知る「智慧の人」、②差異を尊重できる「勇気の人」、③人々と同苦できる「慈愛の人」の三点をあげた。

本書で紹介されている十人は、これらの資質を豊かに備えた、具体的な地球市民のモデルである。

そして、いずれも、教育への献身を通して、「戦争の文化」から、「平和の文化」へ転換しゆく崇高な挑戦に、勇んで立ち上がった先駆者である。

アメリカ、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、中南米——それぞれの地域で、十九世紀後半から二十世紀にかけて、「人間教育」の開花に生涯を捧げた先達<sup>せんたう</sup>の軌跡は、人類の未来を照らす希望の光源といえよう。

その珠玉の教育哲学について考察した本書が、このたびコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジのハンセン博士の多大なご尽力を得て、「ポストン二十一世紀センター」から発刊されることは、創立

者として無上の喜びである。

十人それぞれの人生には、ハンセン博士が指摘されている「react (否定的反応)」から「respond (肯定的反応)」へ、言い換えれば、「宿命」から「使命」へと、人生の意味を大転換させたドラマがあった。

ベートーヴェンの「第九交響曲」のごとく、自らの苦悩の闇を敢然と突き抜け、皆が「生きる歓喜」を味わい、「幸福」を享受できる社会の建設を目指した、十人の「精神の巨人」の生涯——。その偉人たちが奏でた「生命の調べ」が、本書には躍動している。

国家やイデオロギーのための教育ではなく、人間の尊厳と幸福を輝かせるための教育へ——本書が、世界各国の教育関係者とともに、二十一世紀を担いゆく若き世代に、限らない「勇気」と「希望」を与える「精神の糧<sup>か</sup>」となることを願ってやまない。